
曇りのち晴れ時々退魔

島野 秋月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曇りのち晴れ時々退魔

【Nコード】

N4176J

【作者名】

島野 秋月

【あらすじ】

日々感じることは、退屈。人生にあまり面白みを感じることが出来ない毎日。それを反映したかのような文芸部。たった二人の部には会話すらほとんどない。ふと、そんな時に現れた新人部員。起こり始める怪現象。一体何が起きているというのだ？そしてこれから何が起ころうというのだ？

第一回 魔を滅する者（前書き）

長編小説第一作目です

未熟で至らない部分も多々ありますが、これからよろしくお願ひします！！

第一回 魔を滅する者

第一回 魔を滅する者

オレンジ色の光が射す放課後の部室。特にやることがあるわけもなく、ボーと辺りを見回していた。部室というには少し狭い。三畳程の部屋の中央には、長机が一つ置かれていて、周囲の壁は窓がある面以外は本棚で埋まっている。この本棚のせいで元々あまり広くない部屋がさらに狭くなっていた。

「部長。こんにちは」

「……」

「部長？」

「ん？あ、ああ、中峰。いつ来た？」

「今ですけど……どうしたんですか？ボーとして」

いつの間にか後輩部員の『中峰董』が専用の席に座っていた。狭い狭いといつも言っているものの、正直言うと我が『文芸部』には俺と中峰、二人しか部員がいない。本当は十分過ぎる広さだ。

「いつもの事だよ。それよりも遅かったね。何かあったの？」

「いえ、特には。友人と少し会話をしていたので」

「ふうん、そう」

そう言っただけ俺は、窓の外を眺める。夕焼け色に染まるグラウンドでは、運動部の連中が熱心に練習にうちこんでいた。中にはグラウンドの隅でサボっている連中もいるが、どうせやる気がない一年だろ。

視線を部室に戻すと、中峰はマイノートパソコンに向かってカタカタと文字を打ち込んでいた。

「……」

文芸部は……これでいいのだ。なし崩し的に『部長』になってしまった俺。

どうにも人の上に立つのは苦手だから、役に立たないという事を普段からアピールして責任が生ずる問題が起きても、『ああ、こいつだから』と思わせる態度をとっている。

というよりは、これが俺の性格なのだ。いつ頃だったか正確には思い出せないが、確か中学生の時からこうなってしまった。たぶん面倒くさいから。嬉しいことでも嫌なことでも、起こると面倒だから。

「そついえば霧森部長。聞きましたか？」

「ん？何を？」

「六月の連休に文化部の作品展示を行うって話です」

「……知らない」

そう。見事に俺は、周りから『役立たず』の評価を得ている。だから本来部長に回ってくる話だって、後輩の中峰のところに行く。

たった一ヶ月前に入ってきた中峰のところに。

「やっぱり知らなかったんですね」

「ああ、俺だからな」

俺の評価を知ったからなのか、一ヶ月という時のせいなのか、今では文芸部にほとんど会話はなかった。『部長は、どんな本が好きですか？』と訊いてきた中峰は、もういないのである。部屋に響く音は、カタカタとキーボードを叩く音だけだ。

「部長はどうします？何か作品だしますか？」

「俺か？俺は別に……」

趣味で書き始めた『小説』。確かに何作品かは完成しているが、とても人前にだせるものではないし、それに小説なんかは展示会に出す物ではない。当然ながら小説というのはどんなに短くても数ページ、展示会で立ち止まっずと読み続けるアホなんていない。

「そついえば部長の小説って読んだ事ないんですね。どんなの書いているんですか？」

「え？そ、そうだな。色々かな。特にジャンルは決まってないよ」

「そうなんですか。今度読ましてくれませんか？」

「え？いや、なんだ、なんつうか俺の小説は人に見せる様な物でもないし……」

「そんな事はないと思いますけど……部長っていつもそうですね」

「ん？何？」

「い、いえなんでもありません」

それから会話がなくなつた。そう、これでいいのだ。今日は会話が多すぎた。これでいい。これが『俺』でこれが『文芸部』なのだ。暫く経つと中峰はパソコンを鞆にいれると部室を出ていった。時計を見ると五時三十分。まだ中峰が来てから三十分足らずだ。

どうしたのだろうか？いつもなら六時ぐらいまではいるのだが……別にいいか。他人が早く帰ろうが何しようが自由だ。俺が関わることもない。

「さて、と」

俺も帰ろうかと思ひ足元に置いてあつた鞆を取る。と、気づいた。中峰専用の椅子の下に何か落ちてている。

なんだろうか？近づいて手に取る。

……石か？一円玉ぐらいの大きさの石だった。ただの石ではなく、艶々として黒光りし怪しげな雰囲気漂わせている。なんていうのか、まるで邪気でも纏っているかの様に。

それなのに不思議と綺麗な気がして、思わずポケットに突っ込んでしまった。

中峰の物だろうか？今なら追いかければ間に合うかもしれない。

「……ま、いいか」

別に今すぐに必要になりそうな物というわけでもなさそうだ。明日渡せばいい。毎日会つものだから。それよりも小腹が空いた。購買はまだ開いているだろうか？

当然の如く、購買は閉まっていた。と、思つたら開いていた。なんとる偶然。購買の営業時間は、四時までなのに。

「あ、霧やん。どうしたの？」

少し不思議に思っただけで見ていると、カウンターにいる女性がこちらに気づいて声をかけてきた。ショートヘアの少し茶色が雑じった髪、細い整った眉、ちよつとたれ目。驚くほど美人だったり可愛いわけではないが、おっとりとした優しい雰囲気。漂ったその女性に惚れる男子は多かった。

「どうしたのって……そりゃこっちの台詞ですよ。なんでまだ開いてるんですか？」

「私がいる時ぐらいは、少し長く営業しようかなって。部活終わりの少年達何か買っていつてくれるかもしれないでしょ？」

「ふうん。頑張りますね」

「お姉さんだから」

親の手伝いで購買にたまにいる『有明詩音』さん。実は、昔からの知り合い。というよりは、家も近所でよく遊んでもらったりしていたから、幼馴染みという表現の方がピッタリくるかもしれない。もちろんながら年齢は、俺より上で二十歳。

購買で働くのはあくまで定職が決まるまで、ということだったが、この分だと購買のお姉さんが定職になりそうだ。

「それで霧やんは何をお求めかしら？」

「とっておきパンある？」

「あゝ残念。さっき自分で食べちゃった」

「……商品食べるなよ」

「自分で作ってるパンだからいいのよ」

「まあ、いいや。じゃ」

焼きそばパン。そう言うおうつとした時だった。詩音さんは、俺の背後に現れた人物に興奮し、さらには慌て始めた。

「い、い、いらっしや、しゃいませー！」

「やあ、詩音さん」

でた。詩音さん憧れの『成宮敦』二十七歳。体育の教師だ。体育教師のくせに博識で頭がよく、どの教科も得意らしい。容姿も悪くなく、というよりはかっこいい。性格も接しやすい性格だから、男

女問わず生徒にも人気が高い。

「大変ですね。こんな遅くまで」

「え、ええ、えと、いえそ、そんな事はないです!」

俺はそつとその場から離れた。あの様子じゃ後三十分会話は終わらない。それなら下校途中にコンビニに寄ったほうが早い。それに詩音さんの邪魔はしたくなかった。

やれやれと首を振りながら、下駄箱で靴を履き替えていると、背後から声をかけられた。

「よ、霧森。今帰りか?」

クラスメイトだ。部活終わりが、汚れた体操服姿だ。

「ああ、みりやわかるだろ」

「そりゃ見ればわかるけどよ。一緒に帰ろうぜ」

「悪い。ちよつと用事があるんだよ」

そう言うところクラスメイトを置いて歩き出した。着替えを待っているのも面倒だし、どうせ数分も歩けば分かれ道で、はい、さようならなのだ。一緒に帰る事もない。

校門を出ると、部活終わりの生徒達が騒ぎながら下校していた。五、六人の集団が騒がしい上に歩道を塞いでいるので邪魔だったらありやしない。

大体何故あんなにも大勢で下校するのだ。通行人の邪魔になるだけだし、大勢いたって仲が良い奴としか話したりしないだろう?五人いるとすれば、二・二・一のペアができる。俺の経験上では、大体これだ。そして俺は、一だった。

現に今も一人だけ、二・二ペアの後ろにひつついて歩く奴がいる。こいつの気持ちは大体分かった。

会話に入りたいのだが隙がみつけれず入れない。話している話題が分からない。少し会話に混ぜられてもすぐに会話がなくなる。その内自分はいなくてもいいのでは?という考えが起こり、会話に入るうという気などしなくなる。

そして行き着く先が、そう俺だ。こんな人間になる。

「……」

なんでこんな人間になってしまったんだろう。

小さい時は、他人の事なんか気にせず暴れまわったものだ。そこそこ勉強だつてできたし、運動だつて得意だつた。だから現在よりも周りの評価はずつとよかつた。

あの日まで。

それは小学校五年の時の喧嘩。

俺が悪いわけではない。あの喧嘩は一方的に相手が悪かつた。それはそうだ、なんたつて女子をいじめていたのだから。

俺は元々喧嘩が好きだつた。嫌な奴をぶちのめせば清々したし、背がでかく運動ができた俺は負けることは絶対になかつた。だから好んで喧嘩をしていた。

それが悪かつた。ガキの喧嘩は両成敗。それが鉄則だ。だから喧嘩ができた。

それなのにあの時の担任は俺だけに怒つた。相手も悪いはずなのに俺だけが悪者になつた。それからというもののクラスメイトの反応が少し変わった。

それはほんの少しだが、確実に大きい変化だつた。

例えば、話す時に目を合わせない。自ら話しかけてくる奴がいなくなつた。

そう、それだけの事。

だけどそれは小学生の俺にとっては、とてつもない苦しみだつた。だから俺は、暴れるのをやめた。大人しく生きようと決めた。その後数回キレた事はあるが喧嘩に発展することはなかつたし、怒りは全て自分の持ち物にぶつけた。

それで活発性が失われた。あまり運動もしなくなり、その代わりに本を少しだけ読むようになった。アウトドアから完全にインドアになつたのだ。

そして中が、く？……ふと考え事をやめて顔を上げる。

そこは、校門を出てすぐの歩道。後ろには校舎がそびえ立ってい

る。

先程となんら変わり（・・・）の（・・）ない（・・）風景。

「どうなってるんだ？」

そう風景に変わりはない。だが、それがおかしい。俺は歩みを止めた覚えはない。

考え事をしている間もずっと歩いていたはずだ。その証拠に運動不足の脚は、少し疲れてきている。

頭を振ってもう一度辺りを見回す。やはり見える風景は、校門前の歩道。

おかしい。どうなっている？ まったく進んでいない？ 数分は歩いていたはずだぞ？ 何故？ 何が起きた？

駄目だ、焦ってはまとまる考えもまとまらない。冷静にならなければいけない。

まず俺は、深呼吸をした。数回もすると少し落ち着き、考えることができるようになった。次に目を瞑り、耳に感覚を集中させた。

違う。先程から不審に思っていた事が確信に変わった。

物音が一切しないのだ。車の音、校舎の方から聞こえていた生徒達のざわめき、何かしら必ず聞こえるはずの音がまったくしない。

目を開ける。先程は焦っていて気づかなかったが、目の前にいたはずのうるさい生徒共がいなくなっていた。

……俺は目を瞑って、全速力で走った。ただの勘違いかもしれないからだ。たまたま音が聞こえないだけ。実は考え事をしている時足は止まっていた。それだけのこともかもしれない。

しばらく走ってから目を開ける。

「一体どうしたってんだ?!」

不安を拭い去ろうと大声で独り言を言い放つ。そして目を瞑り、また全速力で走る。今度は、疲れて走れなくなるまで走った。

荒い呼吸を整えてから、目を開ける。

「……………」

目の前には自宅があった。やはり勘違いだったのか？ それとも……

…いや、どうせ分らない事を考えてもしょうがないだろう。勘違い
だった。それでいいじゃないか。それで全て解決。万事OKだ。
ぐるう〜

安心すると腹がなった。

そういえばコンビ二に寄っていなかった。

第一回 魔を滅する者（後書き）

少しわかりにくいですね……第一話は今からまだ続くのでよろしくです……！

第一回 魔を滅する者2（前書き）

第一回 魔を滅する者の続きです！

続きが気になった方はどうぞ！！

第一回 魔を滅する者2

2

翌日、今朝から俺は気分がよかった。久々に小説家の血が沸々と沸きあがってきたからだ。当然といえば当然だった。昨日の体験が普通に生きていたら出来ない体験だからである。

これは小説のネタになる。考え始めると物語がどんどん組みあがっていった。

「霧森部長！」

既に主人公は完全に出来上がっていた。ヒロインはどうしようか、ありきたりの女の子じゃ面白くない、かと言って奇抜すぎる女の子でも受けは狙えないし。

「霧森部長！」

あんな体験だから物語は、ファンタジー系になるよな。学園恋愛もしたいから、そうだな『学園ファンタジー』というところか。いやはや、楽しくなりそうだな。

「霧森部長！」

「!?!とと、危ねえ！な、なんだ中峰か……びっくりした」

考え事をしている最中に背後から突然大声で名前を呼ばれたので、びっくりして転びそうになった。なんとか体勢を立て直し後ろを振り返ると、そこには走ってきたのか少し荒い呼吸を繰り返す中峰が立っていた。

「な、何回呼んだら気づくんですか!?!」

「え、いや、すまん。考え事してたもんで。しかしそんなに急いでどうしたんだ？まだまだ余裕の時間だろ？」

携帯を見ると現在七時三十分、学校まではここから十分かからないし、八時までに登校すればいいのだから余裕だ。

「珍しく霧森部長が遅刻しない時間に歩いていたので一緒に登校し

ようかと思つて声をかけたんですけど、何回呼んでも気づかないから走つたんですよ」

「そ、そうなのか。いやごめんね」

「別に謝ることもないんですけどね」

そう言つとニコつと笑う中峰。久しぶりに見る笑顔だ。中峰が入部した当初、よく見せていた笑顔。不思議と気持ちが安らぐようなそんな笑みだった。

とはいつても会話という会話が発生することも無く、ほとんど無言のまま学校に着いた。

下駄箱で中峰と別れを告げると、上履きに履き替え、教室に向かった。

「あ、霧やん。ちよ〜どよかった」

「詩音さん。おはよう。どうしたんですか？こんな所で」

職員室の前を歩いてみると、詩音さんが職員室からでてきた。

手になにやらお弁当みたいな物を持っているが……ま、まさか成宮への手作り弁当だったりするのか？そんな、俺だつて詩音さんの弁当食べたことがないのに。

俺は動揺しながらも、手に持っているお弁当について訊ねた。

「そ、それ、つてま、まさか成宮への手作り弁当とかですか？」

「ん？これ？やっただあ〜違つて。霧やんの担任のお弁当だよ。さつき落つこちてるの拾つたんだ。そうそう、だから霧やんこれ担任に届けてくれない？」

「な、なんだ。そうなのか」

俺は安堵の息をつくつと、弁当を受け取り、再び教室に向かった。

教室に着くと教壇に立つていた担任『鷹谷藍子』に弁当を渡し、自分の席に着いた。

窓際最後尾という史上最高によい席。冬は日差しが当たり暖かく、夏は窓を開ければ涼しい。しかも授業中に寝ていてもばれにくい。生徒なら誰でも一度は座りたいと思うであろう席だ。

「よお、霧森。何か機嫌よさそうじゃん。何かあったのか？」

窓の外を見てみると、いつの間にか来たのか前の座席の『雉島賢一』が話しかけてきた。

少し茶色の髪は、短くスポーツ刈り。眉は剃っているのかあんまりない。ソフトマッチョの体系に悔しいかなカッコいい声。俺から見たらカッコよくないが、女子の連中には人気がある。それが雉島賢一。ちなみにサッカー部のエースだ。

「別になんでもねえよ」

「うっそでえ。いつも無表情なお前が笑ってるんだから、何かあったに決まってる」

「失礼な奴だな……お前」

いつも無表情。自分ではそんなつもりはなかったのだが……まあ、普段何もしてないのだから表情がある方が変じゃないのか？ そう言ったら雉島は『どんな奴だって、何もしてなくても多少の表情はあるさ。人は何もしてなくても考え事ぐらいはしてる。考え事していれば考え事をしている表情になる。それなのにお前は考え事をしている表情さえない』だそうだ。

「まあ、そんなことよりな。そんなお前が笑ってるんだ。おめでたい事があつたに決まってる。おめでとう、やったんだな？」

そう言つて雉島は、親指を人差し指と中指の間に挟みクイクイツと親指を動かした。

このジェスチャーの本当の意味はよくわからないのだが、どんな感じの意味かは分かる。

「やったんだな？ という言葉と組み合わせると、そうつまり『やった』とは『SEX』の事であり、その一過程のジェスチャーが親指のクイクイである。」

つまり雉島はろくでもない奴ということだ。

「お前つて最低な男だよな。いつもそんな事ばかり考えてるのか？」

「最低つて、お前は生物の本能を否定するのか？」

「……アホが。まあ、いい。前向けよ。藍ちゃん見てるぞ」

怖い顔をして藍ちゃん（担任・鷹谷藍子のあだ名）がこちらを見ていた。雉島は慌てて前に向き直り、俺は藍ちゃんが今日のお知らせの話に戻ると机に突っ伏した。

暫くすると眠気が襲ってきて、俺は眠りについた。

夢、だろう。不思議な夢だ。

俺の目の前で繰り広げられている光景は、とても現実とは思えないような風景だった。

二人の人物が争っている光景。それは凄まじく、時たま片方の人物が吹き飛ばされた。

暫く見ていると、片方は女だという事がわかった。もう片方は、人間という言葉が当てはまるのか分からない生物だった。確かにそれは、人型なのだが、どこかが違う。歩き方はぎこちないし、時折人間のものとは思えない奇声を発した。

「~~~~~!!」

女が何かを叫ぶと、その左手に光の弓が現れた。同時に現れた右手の光の矢をつがえると、人型の生物に向かって放った。命中こそしなかったものの、明らかに人型の生物に動揺が見えた。女から逃走しようところらに走ってくる人型の生物。

違った。逃走しようとしているのじゃない。俺を見つけたのだ。何もできずに突っ立っている俺を。勝ち誇ったかのように人型の生物は奇声を発した。

「長！」

女が何かを叫んだ瞬間、人型生物の腕が俺の胸を貫いた。

夢、そのはずなのに酷く痛い。流れ出る血が暖かい。目の前が暗くなる。意識が闇に落ちた。

「霧森部長？大丈夫ですか？顔色悪いですよ」

「ん？あ、ああ大丈夫だよ」

授業中にみた夢はなんだったのだろうか？酷くリアルな夢だった。

細かいところはあまり覚えていないが、あの夢にでてきた場所は分かる。それはこの『桜桃高等学校』のグラウンドだったからだ。

「保健室に行ったほうがいいんじゃないですか？」

「いや本当に大丈夫だから」

とは言うものの体調が悪いのは事実だった。どうゆうわけか胸が痛いのだ。夢で人型の生物に貫かれた部分が痛い。どうゆうことなのだ？あれは夢のはずだ。現に俺は生きている。あれが現実だったら死んでいるだろう。

「でも」

「大丈夫だって。確かに少し調子悪いけど、少し時間が経てば良くなるよ」

変な姿勢で寝てしまったのだろう。だから胸が痛い。それがきつと夢に影響したんだ。そうあれはただの夢だった。それだけだ。

胸の痛みも徐々に薄れてきている。このぶんなら十分も経てば、完全に痛みも引くだろう。

「それならいいんですけど……」

「それより中峰も変じゃないか？いつもと違って落ち着きがないじゃないか」

いつもパソコンに向かってカタカタと文字を打ち込んでいる中峰。それなのに今日は落ち着きがなく、あちこちをちらちら見ている。俺が部室に入った時も部屋の隅で四つん這いになって何かを探しているようだった。

「そ、そうですね？別にそんな事はないと思いますけど」

「そう、別にそれならいいんだけど」

別に落ち着いてない理由が知りたいわけでもないし、無理に訊いて嫌われても困る。それに本人がいつもと同じと言うならいつもと同じなのだろう。

「冷めてますね部長……」

「ん？何か言った？」

「いえ、べ、別に」

そう言うと中峰はパソコンをしまつと部室を出て行った。

時刻は五時十分。中峰が部室にいる時間が日に日に短くなっているような気がする。ついに文芸部自体が愛想をつかされてしまったのだろうか？だとしたらそれは俺のせいなんだろうな。部員も一人となれば、いよいよ廃部だ。

ガチャ

「中峰さん帰るの早いわね。何か聞いてるかな？霧森君」

「藍ちゃんか。別に聞いてないよ」

我が文芸部の顧問は何故だか藍ちゃんだった。受け持ち授業は体育で、根っからのに体育会系なのだ。そのせいか部室には滅多に姿を現さなかった。こうして時折姿を見せる時でも十分ぐらいで帰ってしまう。

「そうなの。ところで来月の作品展の事だけど、何かだす予定はあるのかな？」

「ううん俺は別にはないです。中峰はあるかもしれないですけど」

「そうわかった。霧森君もだせたらだしてね。期待してるから」

「善処します」

藍ちゃんが部室を出ると、胸の痛みはほとんど消えていた。

体調も良くなったし、部室にいてもやる事もないので帰ることにした。部室を出ると、オレンジ色の光が射す廊下では、卓球部が練習をしていた。熱心に練習に打ち込んでいる。そして何故だか気になる飛び交う黄色いピンポン玉。こういう物って何故気になるのだろうか？まあ、大抵はすぐ飽きるのだが。

現にもう飽きたので下駄箱にむっ

ドン

「うあー！」

歩き出した途端、背後から何者かに追突されてよろめく。なんとか体勢を立て直すと、男なら精一杯嫌な顔で睨もつと後ろを振り返った。

「いたた。あ、あの、す、すみません！」

その声に振り向くと、何故だか女は入部届けと書かれた紙を持っていた。

「え？あ、ああ、そうだよ。てゆうかどこにあったのそれ？」

「ここですけど」

そう言っ指差した先には、大量の入部届けと女の子の絵が描かれた紙だった。

不思議に思って絵が描かれた紙を手にとると、何やら女っぽい丸い文字でこう書かれていた。

『部長へ 部長のだからしなさは天下一品、人の話は右から左へ、そんな部長ですからどうぞせこの紙にも気づかないと思いますけど一応書きました。』

入部届けは、ここにまとめて置いときます。ここに置いておけば失くすこともないと思いますからね。私がない時に入部希望の子がいたら、ちゃんと渡してあげてくださいよ。」

中峰』

だらしなさ天下一品、人の話は右から左へ、確かにその通りだが

……中峰ってこんな事思ってたのか。なんだか悲しい。

「……それに名前書いて」

「郷谷桜、つとこれでいいんですよね？」

郷谷桜？俺の学年には、そんな名前の女はいなかった気がする。

「うん。OK。じゃあ職員室で鷹谷藍子先生に渡してきて」

「わかりました」

まあ、別に気にすることでもないか。この時期の入部希望者なら三年はまずありえない。きつと一年だ。だから名前を知らない。制服が違うのも、転入生だったり、何かわけがあったりするのだろう。だから気にしなくていい。

そんなことよりも中峰……。

「なんだか本当にやめそうだよなあ文芸部」

中峰が文芸部に入って、まだたった一ヶ月しか経っていない。そ

れなのに中峰がない部活は想像ができなくて、何故だか心苦し
なつた。

第一回 魔を滅する者2（後書き）

まだまだ話は続いてまいります（笑

次もよろしくです！

第一回 魔を滅する者3 (前書き)

第一回三話目。

まだまだ、話は展開が遅くてすみません……

第一回 魔を滅する者3

3

郷谷が来てから三日が経った。この三日間、中峰はほとんど姿を現さなかった。実は既に退部届けを出していたりするのだろうか？
「ただど藍ちゃんからは何も聞いていないしなあ。」

「先輩の小説面白いですよ！」

「そ、そうか？」

郷谷があまりにも小説を読ませるとうるさいので、学校のプリンターを使って刷り上げた物から読ませていた。本当は読ませたくなかった。小説を書き始めた頃は、誰かに読んでもらいたくてもうがなかったが今は違う。自分が書いた駄文なんかを他人に読んでもらいたくなかった。どうせ俺が書いた小説なんて既存の物の影響受けまくりでつまらないからだ。

「この部分がいいです！この台詞……ああ、感動的ですね」

「さいですか」

今読んでいるのは、中学生の時に書いた恋愛物の小説のようだ。恥ずかしくなるようなストーリーで、いつ読んでも恥ずかしくてしようがない。そんな小説だが初めて人に読ませた小説でもあるから、俺にとつては記念作だ。

「先輩は手書きはしないんですか？」

プリンターが刷り上げている紙を見ながら、郷谷はそんな質問をぶつけてきた。

「手書きはしないな。なんか手書きだと文章が幼稚っぽくなるんだよ」

俺の小説はパソコンという偉大な物があるからできるのである。手書きで小説を書いた日にゃ、世界中の幼稚園生に笑われるような物しか出来上がらない。それは自分がよくわかっている。

ただ、パソコンで書いていて怖いこともある。それはデータが消えた時だ。家にはプリンターがないから普段からこうやってプリントアウトするということはしない。だからデータが消えれば一発アウトってわけだ。一応今使っているUSBメモリー以外にもパソコン本体に定期的に保存しているから大丈夫だとは思う。

まあ、紙だつて同じことは言えるかもしれないが。

「そうなんですかー」

「なんです」

ちなみに郷谷は手書きだ。綺麗な字でわかりやすく表現も素晴らしい。なんで手書きでここまで素晴らしく書けるのかが不思議だ。俺の小説より全然面白いし……。

「あ、霧森部長。なにし……？」

はあ、とため息をついているとパソコン室に中峰が入ってきた。

すぐに俺に気づいてこちらを見る。が、すぐに顔をしかめた。

「ん？どうした？」

「いえ、別に」

そう言う中峰は少し強めに扉を閉めて、パソコン室を出て行った。

「……」

「先輩、ここ漢字間違ってますよ」

「……」

「先輩？」

「あ、ああ、何？」

「ここ漢字間違ってますけど」

「え、嘘」

中峰はこのパソコン室に何か用があったんじゃないのか？なんですぐに出てったんだ？それに少し怒ってたような気がする。一体どうしたんだ？

俺何かしたのか？

ガラ

また扉が開く。中峰　かと思つたが、入ってきたのは雉島だつた。

「よゝす。元気が霧森」

「お前程ではないかな」

「あいかわらずだな」と、あれ？お前の隣に女の子が見えた気がしたんだが、気のせいだったか？」

「はあ？」

いるだろ。郷谷がとな、り、に？あれ、いない。

「かつしいなあ。まあ、いいか。ところで霧森は何やってんだ？」

「見て分かるだろ。小説をプリントアウトしてるんだよ」

パサッと最後の一枚が刷り上る。全部で六十四枚。ショートショートの小説が四本、この四本がかるうじで人に読ませられる小説だった。

先程郷谷が読んでいた恋愛物、娘が死んでからの夫婦を書いた話、イジメを見ている少年の話、なんだか自分でもよくわからない話とか、ジャンルも様々だ。

自分の腕のなさ故に長編は書けず、全てがショートショートだった。といってもショートショートが簡単なわけではない。この短さが俺にはあつているから書きやすいのだ。

「ふうん、そうか」

根っからの体育会系の雉島は、まったく興味がなといった感じでそう言うと、何故か俺の隣の席に座った。何だか顔がおかしい。にやけるのを必死で抑えるかのように、無理矢理真面目な顔している、とそんな感じた。またくだらない事でも考えているのだろう。

「そついやな、すぐそこでな董ちゃんを見たんだよ。なんかえらく不機嫌そうな顔しててな、どうしてだろうと思ひ董ちゃんができてきたパソコン室を覗くとお前がいたんだ。なあ、まさかとは思つがお前ここで無理矢理しようとしたんじゃないのか？」

やっぱりな。それが言いたかつたわけか。だから顔がにやけてやがつたのか。まったくなんでこいつが俺の友達なんだ？いや、別に

正式に名乗ってるわけじゃないから、友達じゃないって言えば友達じゃないのだろう。

「お前一回三途の川に行つて来いよ。なんなら俺が片道切符くれるやるぞ?」

「それ戻つてこれねえし! つうかよ。正直な話童ちゃんとはどういう風になつてるわけ? 一ヶ月以上も放課後は部室で二人つきりなんだろ。何かあつてもおかしくないぜ?」

「別になくもございませぬ。俺は部長で彼女は部員。そんだけの関係です」

そう、そんな関係だ。中峰がいなくなると考えると心苦しくなったりするのは、別に好きだとかそんな感情があるからというわけではない。中峰が文芸部にいるのは、当たり前だと思つうから。部員が俺一人だった時に奇跡的にも入部してきてくれた中峰。それが嬉しかったから。一ヶ月間、中峰と何気ない放課後を過ごすのが当たり前だったから。別に彼女に恋しているわけではない。

これ以上の進展は望まない。願うならばこのまま変わらずにいたい。

「まったくだらしな奴」

「お前に言われるとは……ああ、俺の人生も終わりだな」

「本気で落ち込まないでくれる? 冗談に思えないから」

「そりゃ冗談じゃねえからな」

「……まあいい。そろそろ部活に戻るわ。これ以上サボつてると文句言われちまう」

「お前それでよくエースやつてられんな」

「天才だからな」

そう言つて、雉島はパソコン室を出て行つた。直後に反対側の扉がガラツと開き、突然いなくなつた郷谷が入つてきた。

「おう、郷谷。どこ行つてたんだ?」

「え、ええ、あの、そのお手洗いに」

「ふうん。そうか」

トイレ、か。しかし郷谷はいつパソコン室を出て行ったんだ？雉島が入ってくる直前までは俺と話していた気がする。雉島が入ってきて、目が雉島の方向に向き、雉島に言われて隣を向くといなかった。つまりいなくなったのは、俺が視線を外したほんの十数秒の間。どうやったらこの間にいなくなれるんだ？

「小説全部刷り上りましたか？」

「ん？ああ、全部できたよ。じゃあ部室に戻ろうか」

「はい。そうですね」

まあ、いいか。別に。きっと俺が気づかない間に出て行ったんだ。気づかない事や見落とすことなんてのは結構あるものだ。今回だつてきつとそろそろ。

だから考えるのはやめよう。

第一回 魔を滅する者3（後書き）

第一回三話目は短いですねw

続けてのせると長くなってしまいそうなので、やめました。

ここまで読んでくれていた感謝です！

第一回 魔を滅する者4（前書き）

やっと物語が展開してくる第一回4話目

長いおつきあい感謝です！

第一回 魔を滅する者4

4

「詩音さん。おはよう」

「おはよう。霧やん。どうしたの？調子悪そうだけど」

その通り、ずばり調子が悪かった。またアレにあったのだ。いくら歩いて走っても周りの風景に変化がない。その空間に捕らわれたかのような現象。それをヒントに書き始めた小説では、この現象を『捕縛結界』とよんでいる。

「いや、そんな事ないです。えっとそれじゃ詩音さん、仕事頑張ってください」

教室に向かうが、かなり胸が苦しい。やはり保健室に寄ってから行こうか。どうせもう遅刻しているのだから、保健室に寄って休んで行くぐらい別に問題ないだろう。

保健室に着くと、保健婦に体調が悪いことを告げ、三つあるベッドの一つに寝転がった。カーテンを閉めるのを忘れたが、長居する気はないから別にいいか。

「ふう〜」

『捕縛結界』。今回も知らない間に抜け出せた。目を瞑って走って走って走りまくった。ただ今回は、前回と違って捕らわれている時間が長かった。おかげで余裕で登校できる時間だったのに、四十分近く遅刻してしまった。

しかし『捕縛結界』。これは一体何なんだ？どうして急に起こるようになった？ここ数日の間に何かあっただろうか？とりあえず思い出してみれば解決の糸口が見つかるかもしれない。

まず、中峰が部活にほとんど姿を現さなくなった。郷谷が入部した。……それぐらいだよな。特に変わったことは……ん？これは？「しまった。すっかり忘れてたな」

制服のズボンから手を引き抜くと、それを顔の目の前に持つてくる。

先週の月曜日に拾った石だ。まさか一週間もこれの事を忘れていたなんて。もしこれが中峰の物だったら悪いことしたな。俺の忘れっぽい性格にも困ったもんだな、なんて思っていると保健婦がいつの間にか目の前に立っていた。

「霧森君。私ちよつと用があるから行くけど、調子が良くなったら教室行きなさいよ」

「わかりました」

保健婦が出て行くのをなんとなく目で追い、見えなくなるとまた石に視線を戻した。

先週見たときも思ったが、禍々しさの中にも美しさがある石だ。何故だかずつと持つていたくなる。だけど何だろう？先週見た時と違う気がする。なんと言ったらいいかわからないが、さらに黒みがかった気がする。黒から漆黒に変わったような、吸い込まれそうな黒とも言ったらいいのか、とにかく先週とは違った。

そこまで考えると石を再びポケットに突っ込み、ベッドから降りる。少しだが体調も良くなった。これなら全然問題ない。

軽く伸びをしてから保健室を出ると教室に向かう。途中、二階の踊り場に何故だか郷谷がいた。体育座りで顔を膝に埋めているから顔は見えないが、セーラー服を着ているから間違いないだろう。しかし今は授業中だ。どうしてこんな所にいるのだろうか？

「あゝ郷谷か？」

「え？あ、せ、先輩」

俺の声に顔を上げる郷谷。心なしかいつもより元気がないように見える。何か嫌な事でもあったのだろうか？もしかしてイジメとか？「どうした？こんな所で。しかも授業中だぞ？」

「いえ、その」

バツが悪そうに顔をあさつての方向に向ける郷谷。やはり何か嫌なことでもあったのだろうか。それも人に言えないような事。

「まあ、言いたくないなら別にいいよ。郷谷から見たら、俺がここにいるのおかしいもんな」

「えっと、あの、その……」

「俺は教室行くけど、郷谷も行けるようになったら行けよ。じゃ」
それだけ言うと、俺は郷谷を置いて再び教室に向かった。

自分の教室の前に着くと、ばれないように教室を覗き見る。当然ながら授業中。もの凄く入りにくい。それでも入らないと出席日数は稼げないし、そもそも入らなければここに来た意味がない。

ガラ

「すみません。遅刻しました」

「ああ、霧森君。おはよう」

「え？成宮先生？」

入った瞬間向けられる最高の笑顔。この眩しすぎる程の笑顔は、成宮。奴のものだ。今は数学の時間のはずだ。何故ここに成宮が？

「数学の先生は風邪で休みだね。僕が変わりに授業やってるんだ。まあ、そういうわけでほら席に着いて」

なんだってよりによって成宮なんだ？一番いけ好かない野郎じゃないか。数学ができる先生なんて他にもいるだろうに。

「よお、霧森。今朝からストーカーでもしてたか？」

席に着くと、成宮の眩しすぎる笑顔とはまた全然違う、にたにたとしたイヤラシイ笑顔をして話しかけてくる雉島。毎度の事とはいえ、こいつの冗談は非常に疲れる。たまには普通の事が言えないのだろうか？

「お前をストーカーしてやるうか？」

「う、それは嫌だな。ま、それよりもどうしたよ？なんか顔色わりいぞ」

「そうか？別にそうでもねえよ。ほれ、それより前向けよ。殺人笑顔を向けられるぞ」

「殺人笑顔ねえ、確かにそうかもな」

そう言うと前に向きなおる雉島。が、すぐ机に突っ伏して眠り始

める。まったく呆れた奴、とは思ったが俺もしばらく授業を聞いていると眠くなつたので、机に突っ伏した。すぐに睡魔が襲ってきて、俺は眠りについた。

「ちくしょ〜面倒だあ〜」

放課後、俺は渋々図書室の整理をしていた。六時限目・古文の授業中に寝てしまった為だ。古文の先生『桐江沙耶子』は、通称『鬼沙耶』と呼ばれ厳しい事で有名だった。その授業中に寝たのだから罰は当然。鬼沙耶は図書委員の担当だから、罰は図書室の整理ということになった。

「お前は面倒なだけだからいいじゃねえか。俺なんてこの後デートだったんだぜ」

「デート？また前と違う女か？」

エースでかつこよく、本人も女好きだからか、隣を歩いている女は大体いつも違った。本人曰く、一時間ごとに女を変えて二十四時間遊んだことがあるそうだ。

「ああ、三組の絵梨菜。知ってるだろ？」

「ミス・桜桃だっけ？」

去年の『桜桃祭』で行われたミスコンで、見事グランプリに輝いた二年三組『堀北絵梨菜』。一年生でグランプリをとるということ自体が驚きだが、投票率が九十パーセントを超えるという信じられない快拳を達成した。

俺はというと、少数派の残り十パーセントだ。確かに堀北は誰から見ても綺麗なのだが、なんというか雰囲気は苦手だった。

「羨ましいだろ」

「別に。俺好みじゃないし」

「素直じゃねえな。ま、今日で終わりかもな。絵梨菜ってさ、すぐ機嫌悪くするんだよ。この間もさ……」

雉島の愚痴を聞くのも嫌だから、何も言わずに他のコーナーに移る。図書室の一番奥、日が当たらない『その他』のコーナー。誰も

利用しないのか、棚に並ぶ本は埃を被っていた。その割に本は整理されていなくて、作者はバラバラだし、一巻の次に五巻が来ていたりとかかなり乱れていた。

別にこんな所は整理しなくてもよさそうだが、どうもこの乱れようは許せなかった。どうせ本の数自体はそこまで多くないから、簡単に片付くだろう。

「うげ、汚ねえ」

本を掴むと埃が舞い上がる。相当長い間利用されていないようだ、舞い上がる埃の量が半端じゃない。

しかしこの本は何なんだ？ 『古今東西珍妙生物』、『誰でも簡単黒魔術』、『和式呪い術』………ここが利用されない理由がわかった気がする。こんな本じゃ誰も借りないだろう。

そんな事を思いながら整理をしていると、十分程で半分ぐらいが片付け終わった。

「あれ？霧森？逃げたか！？」

「馬鹿！いるわ！」

「ち、霧森がいなければ俺も逃げたのに」

アホな奴は放っておき、再び整理を始める。

一番下の段、真ん中辺りにある本。他の本とは明らかに何かが違う。そう、他の本とは違い、埃を被っていないのだ。つまりこの本だけは、最近借りられたという事だ。

背表紙に何も書いていないから、何の本かはわからないが、どうせろくな本ではないだろう。とは、思いつつも本を手取る。

薄汚れた茶色い本。表紙には何も書いていない。作者の名前もなしし出版者も書いていない。裏にバーコードもない。

中をめくってみる。

そこにあつたのは小説でも詩でも俳句でもなく、新聞の切抜きだった。つまりこれは新聞や雑誌等の切り抜きを貼っておくスクラップ帳なのだろう。

これなら作者の名前やタイトルがないのは当然だろう。

「ん？これは……」

パラパラめくっていると、ひときわ異彩を放つ新聞の切抜きを見つけた。

なんと発効日、昭和五十年。今が平成十九年だから、三十二年も前の新聞だ。ただ、そこは大した問題ではない。書いてある文字の方が問題だ。

『女子高中生殺害事件。静岡県桜桃町、桜桃高等学校で女子高生の死体見つかる。同校教師が今朝方、学校の見回りを行っていると、文芸部部室に女子高生の死体が放置されているのを見つけた。警察によると他殺。胸をえぐられており、即死であることがわかった。死亡したのは桜桃高等学校所属・郷谷桜。警察は知り合いの犯行と見て調査している』。

ページをめくる。昭和六十年、雑誌の切抜きだ。

『十年前に起きた女子高中生殺害事件。未だに犯人は捕まっていない。その事件に関する情報を我々は入手。〇高等学校に出向き、情報提供者・生徒Aに話を聞いた。「女子生徒が死んだ部室から泣き声が聞こえたり、死んだはずの女子生徒が校内を歩き回ったりしているんです。自分以外にも数十人が目撃しているんです。嘘とか見間違いじゃないんです。本当なんです！」と、そう語る生徒A。生徒の目は恐怖に怯えていた。これはどういう事なのだろうか？少女が成仏しきれずに現世を彷徨っているとしてもいっただろうか？我々が調査を行いたいと学校側に申ししたが、許可はもらえず真相を確かめることはできなかつた。ただ、この話は殺人事件が起きた翌年からあるようで、十年の間に卒業した生徒も何人か見ているという。これだけの人数が見ているというのなら、この話に信頼性は高いだろう。事実ならば、少女の安らかな成仏を願う』。

……まさか、な。同姓同名だろう。この校舎は九年前に建てられた物だ。旧校舎はとつくの前に潰されている。ただ、校舎が建っている場所は同じだ。もしかしたら……いやそんな事はないだろう。部室がまったく同じ場所にできることなどありえないし。現在の校

舎と旧校舎とはつくりも違うはずだ。

「おい、霧森。終わったか？」

「ん？あ、いや、わりい。まだ終わってない」

「なんだよ。マジか？手伝うから早く終わらせようぜ」

「ああ、そうだな」

本を元の場所に戻すと、再び整理に戻った。

整理が終わったのは、七時過ぎだった。普通ならもっと早く終わるはずだった。ここまで遅くなった理由は雉島にある。あまりにも奴の整理は適当だった。

おかげで二度手間、しかも雉島は途中で帰るし。

「ふう、疲れた……。さて、帰るか」

図書室を出る。すっかり暗くなっていて、人っ子一人いやしない。なんとなく怖くて、自然と歩みが速くなる。

カコッ

「!？」

階段を下りようとしたところで、上の方から何か物音が聞こえた。いや、ただの聞き間違いだろうか？

カコッ

違う。聞き間違いではない。音からすると何かの足音のようだが……調べに行くか？でもな、大概こうゆう時に調べに行ったりすると、へんてこな事に巻き込まれたりするんだよな。まあ、漫画とか小説での話なのだが。

……行くか。行くしかないだろう。小説を書く者としては。

ゴクつと生唾を飲み込む。

ここが三階だから、この上は屋上。

こんな時間に屋上？いや、そもそも屋上は立ち入り禁止のはずだが……。

階段を上がると、鍵がかかっているはずの屋上への扉は開け放たれていた。やはり誰かいるのだろうか？

そ〜と屋上を覗く……が、誰もいない。そのまま屋上に出て、あたりを見回す。

と、扉の所からは死角になっている場所に人影が見える。影からするとどうやら女のようにだが、何をしているんだ？フェンスに寄りかかって……まさか自殺？

とりあえず近寄って話しかけようと思い、女がいる方に足を向ける……が。

「誰!」

「わ、え、い、いや、あ、怪しい者じゃ……」

気配を感じとったのか、いきなり振り向く女。

俺は動揺して大げさに手を振り、怪しい者じゃない事を伝えようとする。

「な、え、人間？」

「はあ？」

いきなり女が変なことを言う。俺は人間だぞ？どこをどう見たら人間以外に見える？

「い、いや来ないで!」

「お、おい、だから怪しい者じゃないって」

暗いので表情はわからないが、声からすると怯えているようだ……俺ってそんなに怪しいのか？それとも女がおかしいのか？

答えはすぐにわかった。俺は別に怪しくないし、女もおかしくない。

おかしいのは俺の隣にいるなに（・・）か（・・）。

「……」

無言でたたずむそれは、人型……なのだがどこがおかしい。右肩は異様に膨れ上がり、その右腕はまっすぐの棒とでも言えばいいのか、手も関節らしきものもなかった。

一番おかしいのは、顔。目や鼻があるべきところには何もなかった。それどころか何も無い。耳も口も全て。

俺が動けずに人型をじつと見てみると、人型はそれに気づいたの

か顔をこちらに向け、にやっと笑う。目も口もないはずなのに、そう感じる。

人型は再び女の方に顔を向けると、女に向かって歩き出した。

「こ、こないで……」

女は怯えた声を出すばかりでいっこうに動かなかった。

徐々に迫る人型。

それを目で追うことしかできない自分。

刻一刻と流れる時間。

女に迫る危機。

そして、人型が腕を振り上げた。

「に、逃げる！！」

刹那、俺の声に反応した女は間髪人型の攻撃を避けると、屋上の出口に向かって走る。

女が横を通り過ぎると、俺もそれに反応して女の後ろについて走る。

「な、なあ、あれって何なんだ？」

女にそう問いかけるが、どうやら逃げるのに夢中で気づかないらしい。仕方がないので俺も無言で階段を下りる。

このまま一階まで下り、正面玄関から出れば……。

「お、おいどこ行く？」

三階に下りると、女は二階への階段を下りずに何故か三階廊下へ走り去った。逃げるならどう考えても下へ行くほうがいい。どこかの教室に隠れるつもりなら、それは間違った選択だ。逆に追い詰められる。

どうする？女を見捨てて、自分だけ逃げるか？

……

……

そんな事できるわけがないだろ！

「待て！」

全速力で追いかけて、強引にでも下に連れて行く。

幸いなことに人型は追いかけてこない。足が遅いのか、それとも……。
女にはすぐに追いついた。足にあまり自信はないのだが、こんな状況だから限界以上の力でも出ているのだろうか？

手首を掴もうと手を伸ばすが、女がいきなり立ち止まったため空振りしてしまう。しかも足がもつれてそのまま転んだ。

痛ッ、いたた……。

ぶつけた肘をさすりながら立ち上がると、女の姿がなかった。

見失ったか？

目の前にある部屋の扉が開いている。

部屋に入るが、暗いので女がどこにいるのかわからない。

とりえず扉を閉めて、電気をつけようとして思いとどまる。電気をつければ、ここにいると報せるようなものだ。電気をつけなくても、窓から射しこむ月の光でなんとか物の見分けぐらいはつく。

部屋の中央には長机が置かれており、窓がある面以外は本棚で埋められている……って、ここは文芸部部室じゃないか。

何故こんな所に逃げ込んだんだ？

ザッ

長机の下から物音が聞こえる。机の下を覗くと、女がいた。

「……………っ、……………」

何か呟いているようだが、声が小さすぎて聞き取れない。

自分も机の下に潜り、女に近づくと話しかける。

「なあ、おい。聞こえてるか？おい、返事しろよ」

「……き………」

だが、全く気づかない。どうして気がつかないんだ？こんな近くにいるんだぞ？人間が恐怖に陥ると、こんなにも周りの事に気がつかなくなるのか？

確実に気づかせる為に、肩に触れようとしたその時……

ドン！

「……！」

な、もうばれたのか！？いくらなんでも早すぎだろう！
ドン！

扉が勢いよく開け放たれ、人型が部屋に侵入してくる。
心臓がバクバクいつている。人型が極端に馬鹿なら気づかない。
だが、もし人型が人並みの知力を持っているなら……。

ガッ

長机が吹っ飛ばされる！

「きゃあああ！！」

部室入り口に立ちふさがる人型。

もはやこれまで。逃げ場はなく、たちむかう勇氣さえない。

静かに迫る人型。

隣の女を見 月の光に照らされ見える女の顔。

女に向かつて振り上げられる人型の腕。

俺は叫んだ。

「やめろおおおお！！！」

ズ！

目の前の出来事がスローモーションのように進む。

女に突き刺さる腕。倒れると同時に腕が抜け、血が噴き出す。

視界が血で染まる。

俺はそんな事に構わず倒れた女を呆然と見つづけた。

その女、その女は……

郷谷

だったから。

人型がこちらに振り向く。

「つ、次、お、お前」

それだけ言って、人型は去った。

俺は郷谷を……郷谷を抱き寄せると、恐怖で見開かれたままの瞳

を手で閉じた。

どうして郷谷が？一体何が？どうして俺は見逃された？
考えがまとまらない。

これからどうすればいい……ん？

「これ……この石は」

郷谷は石を握っていた。俺が持っているものと全く一緒のようだ。

何故郷谷がこれを？

郷谷の手から石を取ろうとすると

キーン！

強烈な耳鳴りが起こり、俺は気を失った。

第一回 魔を滅する者4 (後書き)

やっと半分くらいでしょうか？長くてすみません！！

第一回 魔を滅する者5（前書き）

第5回目……書くことがなくなってきた。

ちなみにワードからコピペしてるので横書きの方が読みやすいです。

第一回 魔を滅する者5

5

普通にしていようと決めたのは、つい先程だ。

郷谷のあれはただの夢だ。新聞で読んだ記事が頭に残っていたために、あんな夢を見たのだ。目が覚めた時には、部室には郷谷の死体はおるか長机が動いた形跡さえなかった。

部室に倒れていたのだって……。

「お？霧森じゃん。珍しいな教室で飯食ってるなんて」

「学食の気分じゃなくてな」

味がしないパンを無理やり全部口に突っ込むと、朝からしていた考え事を中断して廊下に出て、階段に向かう。

少し風にあたりたい気分だった。

校庭にでも出ようと、階段を下りる いや、そういえば……。

中断したばかりの考え事が、また頭に浮かぶ。

考えない方がいいに決まってる。考えるだけ無駄だし、あれは夢だったんだ。

それなのにどうしてこうも頭に……。

屋上への扉を開ける。

サアっと、心地よい風が頬を撫でる。照りつける太陽が眩しい。

屋上へ足を踏み出すと、昨日の場所を見る。

……そうだよな。別に何も無いよな。

「ふう」

ため息をつくくと、屋上に倒れこんだ。

昼休みはまだまだ時間がある。少し休んでいこう。

昨日はろくに寝ていないからな……まあ、あんな事があったのだから眠れと言う方が無理だ。

暫く空を見続けているとま……ぶだ、がお、ちて……。

「俺は教室行くけど、郷谷も行けるようになったら行けよ。じゃ
それだけ言うと俺は郷谷を置いて教室に向かった。」

……はずなのに、何故俺には郷谷がいつまでも見え続けているの
だろう。確かに俺には、俺が階段を上っていくのが見えたのだが
ちよつと待てよ？俺に俺が見えるわけないじゃないか。

という事は、これはまたしても夢か。

そういえばこんな感じの場面が昨日あった気がする。

「先輩……。少しでも私は助けになれるんでしょうか？」

暫く郷谷といると、郷谷が口を開いた。

先輩、ということとは俺なのか？しかし少しでも助けになれる？な
んの事だ？一体？

疑問符を頭の上に浮かべていると、ついさつき俺が上って行った
階段に人の気配を感じる。ふり向くと、女生徒が立っていた。

あれは、な、中峰？

「こんな所にいたのね。部長を助ける？あなたが？何を言ってるの
？助けるんじゃないくて、殺すの間違いじゃないの。」

階段を下りながらそう言葉を放つ。何を言っている？俺を殺す？
何を馬鹿なことを？

「あ、な、中峰さん。ち、違うの誤解」

「何が誤解なの？私にはわかってる。ここ何日か調べて裏付けもと
った。あなたはこの世に存在しない者。魔 でしょ。」

「確かにもうこの世の存在ではないけど、ただあなた達が魔と呼
んでいる存在じゃ」

こいつら何を話しているんだ？全く理解できない。

「どちらにせよ。私はあな」

キイン

強、烈、な耳、鳴り、が……。

「ふう、ないなあ……どこやったんだろ」

目が覚めると？今度は、部室だった。

中峰が四つん這いになって何かを探しているシーン。これもついこの間あった気がする。

「お、中峰。ん？何してんだ？」

「あ、ぶ、部長。え、えつと消しゴム落したら、どっかいつちゃって」

「そつなの？手伝おうか？」

「い、いえ。どうも本棚の裏にいつちゃったみたいなのでもういいです。あははは」

それから数十分して、中峰が部室を出て行く。俺は、俺を部室に置いて中峰を追いかけた。

というよりは、勝手にそうなった。

「黒封石どこやったんだろ？せつかく部室で拾っ

キイン

耳、鳴り、か……。

「せいじゃない。部長は、郷谷になんらかの理由で？だとしてもなんで？」

今度は図書室だ。中峰が何かを読んでいる。

「まあ、いいや。とりあえず黒封石探さなきゃ。今日は、公園にでも探しに行こ」

キイン

……。

「郷谷さん」

「？！み、見えるの？私が！？」

「私は退魔士。当然。さあ、これでおとなしく……」

「いや、やめてー！！」

……目を開くと、夕焼けに染まる空が見えた。

夢、か。最近よく見る不可思議な夢。気にしたってどうしようもない夢だ。

俺は立ち上がると、ポケットから携帯を取り出して時間を確認する。

既に放課後、五時過ぎだった。

どうも寝すぎてしまったらしい。午後の授業を完全にすっばかしてしまったようだ。

「……はあ、とりあえず部室にでも行くか」

そんな独り言を呟くと、屋上から出て購買に向かった。少し小腹が空いていたので、さきに購買でパンでも買っていこうと思ったが、着いてみると購買は閉まっていた。

どうやら今日は詩音さんは休みらしい。

仕方がないので、教室に戻り、鞆を取ると部室に向かった。

部室に着くと、扉を開けて中に入る。

「誰もいねえ……」

自分の席に腰を下ろすと、窓の外を眺める。

いつもと同じ風景に安堵感を覚える。

やっぱり昨日の事は夢だったんだ。こうして部室でのんびりと過ごせている事が、その確固たる証拠だ。

ため息をついて、やれやれと顔を振ると苦笑いをした。

まったく漫画じゃあるまいし、あんな事本当に起こるわけがないよ。

「こ、これ……」

苦笑いをして一瞬顔を下げた時、見えた物。

席を立て、それを拾う。

これは……まさか本当に？そう思いながらポケットに手を突っ込むと、石を取り出した。

そして今拾った物と見比べる。

ま、間違いない。これは。

「昨日のは夢じゃなかった？」

俺が持っている物と似た石だ。よく見ると形・大きさがほぼ一緒というよりは完全に同一と言っていいかもしれない。

なんでこれが？確か昨日の夢で郷谷が持っていたような気がするが……夢に出た物が何故現実には？いや、本当は全然珍しくない普通の石だったりするのかがちゃ

「あ、先輩。こんにちはです」

「さ、郷谷？お、お前大丈夫なのか？」

石を見て不思議に思っていると、郷谷が部屋に入ってくる。昨日の夢の事が浮かんでしまい、つい大丈夫なのか？と訊いてしまった。

「え？何がですか？」

「あ、いや、別に」

満面の笑みだ。何事もなかったようにそこに輝く笑み。

そうか、あれは本当に夢で、この石も大して珍しい物ではないんだな。郷谷の笑みを見ると、そんな気にさせられた。

石をポケットに突っ込むと、席に座った。

「そういえば先輩。中峰さんでどこにいるか知ってますか？」

「ん？いや知らないけど」

「そうですかあ……」

「なんか用でもあるの？」

「いえ、特にあるわけでもないんですけど」

「そう」

そう言つと、本でも読もうかと立ち上がる。

本棚から、本を取り出そうとすると……。

ゴン

「ぐえー！い、痛い！」

上段の方にあるハードカバービックサイズの本が落ちてきて頭に直撃する。

しかも角が当たったみたいで、猛烈に痛い。

「せ、先輩大丈夫ですか？」

「あ、ああ、なんとか」

あまり痛がつてるのも情けないし、なにより女の子の前だから、やせ我慢をしたが……内心「痛い！死ぬから！マジで！」と、叫びたかった。

「ち、血でてますよ！先輩！」

「え？」

頭を触ると、確かに何か水っぽいものに触れた。

どうやら少し皮が切れたらしい。

「大丈夫ですか先輩？」

「ああ、うん。頭って大袈裟なほどに血でるから心配しなくても大丈夫」

「そうですか。でも拭いておいたほうがいいですね」

そう言っつて、ハンカチを取り出し近づいてくる郷谷。

優しい奴だなと思っつて、手についた血を見

血？

血？

血だつて？

その瞬間に昨日の夢がフラッシュバックする。

郷谷が血まみれで倒れている。

俺はただそれを見ているだけで……。

「先輩？先輩？どうかしました？」

そう問いかけてくる郷谷。

すぐに問いに答えるべきなのだろう。それなのに、それなのに……。

…。

怖い。

郷谷の顔を見るのが怖い。

さつき見ただろ？郷谷の笑顔。死んじやいないだろ？

なのにこの心の底からくるような恐怖感はなんだ？

どうして足が震える？

「先輩？」

そう言つと、郷谷はこちらの顔を覗き込む。
当然こちらからも顔は見えて

その顔は

血で

汚れていた。

「く、くるな!!」

ドン

「きゃ!え、せ、先輩?」

郷谷を突き飛ばすと、俺は手で顔を覆いつくした。

見たくない。なにも、何も見たくない。

昨日のは夢だったはずなのに、なんで、なんでこんな?

『夢じゃないさ。現実。そう、そして郷谷。あいつは化け物なんだよ』

心のなかで声がする。

そう、なのか?郷谷は化け物なのか?

そういえば、昨日見た新聞のスクラップにあいつの名前があった。
死亡したのは、郷谷桜と。

『わかっただろう?化け物だって』

……そうか、俺を『捕縛結界』にはめたのも。変な夢を見せているのも。全て郷谷の仕業なのか。

郷谷が化け物ならここ最近起こる事に説明がつく。

俺が『捕縛結界』にはまった次の日に郷谷は現れた。

間違いない。

「なあ、郷谷。お前さ。生きてるか？」

「え？な、何言ってるんですか？先輩」

「とぼけるなよ。わかってるんだ」

そう言つと、部屋の隅にある箒を手にとつて折る。

ちようどいい具合に尖っている。

これならば……。

「せ、先輩？」

「死なないだろ？化け物なら」

第一回 魔を滅する者5（後書き）

もうちょっとだけ続きます！

おつきあいをどうぞー！ー！

第一回 魔を滅する者6（前書き）

第6話目です！

視点が変わってしまいました！！

第一回 魔を滅する者6

6

どうしてこつも近頃はうまくいかないのだろう？黒封石の事もそうだけど、特に郷谷さんの事だ。

昨日はうまく逃げられたし、今日なんて一度も遭遇していない。

早くしないと部長は……。

まあ、考えてもしょうがないか。

今日は久しぶりに部室にでも顔を出そうかな。

「中峰、一緒に帰らない？おいしい紅茶だす喫茶店見つけたんだ」

「ごめん。今日は遠慮しとくね。部活にでなくちゃ」

「そうか、残念。じゃあ、また明日ね」

「うん、じゃあね」

クラスメイトに別れを告げると、図書室を出る。

ここ最近ずっと図書室に籠りっぱなしだった。郷谷の事を調べるのもそうだけど、悩み事がある時は図書室に籠るのが私の習性だった。

本に囲まれていると何故だか落ちつくから。

でも結局悩み事は解決しなかった。

部活をやめるか続けるか。

別に部活が嫌だとか、ましてや部長が嫌いだからとかではない。

最近は何も凄く忙しいし、これからもっと忙しくなるかもしれない。部活にほとんど出れなくなるかもしれないから。

せっかく念願の文芸部に入って、夢が叶うかもしれないと期待していたのに、なんでよりによってこんな時に忙しくなるのだろう。

もうちょっと人の都合というものを考えてほしい。

そんな事言っても、無理な話だけ……。

「そういえば今何時だった？」

ポケットから携帯を取り出すと、時間を確認する。

五時四十五分。もうこんな時間か。部長はいるだろうか？

文芸部部室に着くと、扉を開く。

がちゃ

「死なないだろ？化け物なら」

扉を開くと、そこには信じられない光景が広がっていた。

部長が郷谷に凶器をむけていたのだ。

い、一体何が？

それにあの部長の表情……あんな表情は見たことがない。

「な、何、し、てる、んですか？ぶ、部長？」

私は震える声をなんとか喉から絞りだす。

「ああ、なんだ中峰か。見ればわかるだろう？こいつを殺すんだよ」

「え？」

もしかして部長も郷谷の正体に気がついたのだろうか？郷谷がやっている事にも。

でもなんで殺すなんて？

「な、中峰さん。た、助けて」

「あはは、何を言ってるんだよ化け物が。中峰に助けを求めてどうする？中峰は人間だぞ？」

……笑ってる。とても冷たい笑みで……。

怖い……怖いよ。

でもやめさせなきゃ……魔を封じ滅するのは、私の役目だから。

「ぶ、部長駄目ですよ。やめてください！」

「ん？なんだ。かばうのか？お前も仲間だったか？化け物の」
ヒュ

部長がこちらに向かって、手にした凶器を投げつける！！

間一髪それを避けると、部長に駆け寄る。

「う！くそ」

拳が振り出されるが、それを屈んで避けると、そのまま当身を喰らわせる。

可哀想だけど普通の人なら、これで間違いなくダウン……。

「ぐ、がは！？な、中峰やるな……。まさか女に一発もらうなんてな」

「え！？な、なんで」

「なんでって……そりゃそうだろう？女の当身ぐらいで男が倒れるとでも？」

「そんな！間違いなく急所に入れたはずなのに！」

部長つてこんなにつよ あ、あれは！

「よそみしてる場合か？」

ブウン！

「あう！！」

「な、中峰さん！」

部長が放った拳がみぞおちにめり込む。

胃液が逆流し、口から漏れ出す。

な、なんて重い一撃。

真正面からやりあったら勝ち目なんてない。

これも私が迂闊だったせいか……。

「ぐ、が、さ、郷谷さん！に、逃げて！」

私はそう言つと、部長に拳を放った。

「逃がさないし。当たらない」

ひらりと私の一撃を避けて、部長が反撃に移る。

が、この私だって弱いわけじゃない。これでも鍛えているのだ。

格闘なら人並み以上に得意！

放った拳はフェイント。

本命は！

ブン

「ぐあ！！」

ドゴウ！

拳を放った勢いによって回転し蹴りを放つ。たぶん後ろ回し蹴りというやつだ。

狭い室内で使えるか心配だったが、思いのほか脚が短……。
そんな事より逃げなくては！

「郷谷さん！ほら早く！！」

「え、ええ」

部室を出ると、とりあえず屋上に向かう。

人がいる所では戦えない。他人を巻き込むわけにはいかないし、
なにより今の部長の姿を学校の人に見られるのは避けたかった。

「ああ、まったく。あははは、情けない」

女にやられるとはな。思ったよりこの媒体は使い物にならなそう
だ。

運動性能は最低だし、耐久性もなさそうだ。

時間をかけて精神的負荷を与えて、楽に乗っ取った意味がない。

こんなに耐久性が低いのなら、使い捨てとしか使えない。

「まあ、私をあんな忌々しい退魔士から救ってくれたのだけは感謝し
なければな。とはいえ、あの女がいなければ私は一生黒封石の中だ
ったのだから、あの女にも感謝かな？ははは」

やっと殺戮の再開が出来る。

数十年前、郷谷とかいう女に封印されていた。

嬉しいなあ、そう思わないか？

屋上に出ると既に暗く、少し肌寒かった。

「え〜と……そこでもいいや」

扉の所からは死角になっている所に座る。本当に少しでも時間稼
ぎをしたいからだ。

「ごめんなさい郷谷さん。完全に誤解していたわ」

とりあえず郷谷さんに謝る。

「いえ、いいんです。仕方ありませんよ」

最近の部長に起きていた一連の現象は、郷谷によるものではなく、

私が落としてしまった黒封石のせいだった。それがわかったのは、先程部長と戦った時。部長のポケットから黒封石が落ちこちたからだ。

「完全に私のせいよね……」

何故だか部屋に落ちていた黒封石を拾ったのはよかったが、その日の内にもかも部屋で落とすとは……まったくマヌケ以外なんでもない。

それよりもよって部長に拾われていたとは……全ては私の失態だ。

「でも郷谷さん。何故すぐに黒封石を部長から取らなかったの？」

「全然気づかなくて……」

「そ、そう。まあ、そうゆうこともあるわね。私も気づかなかつたんだし」

理由はわからないけど、変な気を感じて部長を守っていた。それが郷谷さんだった。

「それで、もしかして郷谷さんて地縛霊だったり？」

「いえ、違いますよ。私はここの土地神です。数十年前に殺されていらい、ずっとここの土地を守ってるんです」

「え、そ、そうなの！？た！大変な失礼を……」

「そんな、普通にして下さい」

まさか郷谷さんが土地神だったとは……そんな事は夢にも思わなかつた。

土地神というのは、当然ながらそう簡単になれるものではない。

ましてや数十年しか経験がない霊が土地神になるなんてのは、普通ありえない話だ。

なんらかの理由で、この場所の土地神がいなくなつたからか、それとも郷谷さんは相当に優秀……なんてことはないと思うけど、とにかく土地神というのは重要性も大きいからなかなかないのだ。「私なんて黒封石の存在にも気づかないくらい鈍感で駄目な土地神ですから……」

「い、いや、そんなこと」

気配を感じる。後ろを振り向くと部長が立っていた。

「そんな事はないと思うけど。死の間際に私を封印したんだから、自分をそんなに責めなくてもいいんじゃないかな？」

にやにや笑いながら、郷谷さんを見てそう言う部長　であって部長じゃない者。

「ま、まさかあなたは！」

部長を見て、驚愕の顔をする郷谷さん。

一体どうしたというのだろうか？

「そうだよ郷谷。あの夜は楽しかったな、悲鳴、血しぶき、恐怖……ああ、最高の夜だった。最高の夜で終わるはずだったんだよ。お前が力に目覚めなきゃな」

「完全に滅する事はできなかったの！？」

「当たり前だよ。力に覚醒したのが死の瞬間。持っていた黒封石に封印するのが精一杯だったんだよ。しかもお前は魂が衰弱きつて土地神になるのに時間を要したみたいだしな。おかげで私を見失ったわけだ」

話を聞くに、どうやら郷谷さんを殺した魔がこいつらしい。

しかも郷谷さんは退魔士としての素質を持っていた。死の瞬間力に目覚め、黒封石にこいつを封印した。

「よそみしてる余裕はどこからくるのかしら？」

私はそう言くと、郷谷と話をしている部長に背後から蹴りを放った。

ブン

「悪いね。当たらないんだ」

「な！？」

私の気配を感じ取っていたのだろうか、蹴りはかすることもなく空を切った。

「このクズみたいな肉体でも慣れれば、普通の人間にやられることなんてないんだよ」

そう言って拳を繰りだしてくる。

「くー！」

紙一重で攻撃を避けながら、反撃をするが簡単に避けられてしま
う。

このまま避け続けるのはキツイし、避けても倒せはしない。

こうなったら肉を切らせて骨を断つしかない！

「はあ、はあ」

「そら、どうした？もう疲れたのか？」

ビュン！

「くう！」

拳が肩にヒットし、衝撃にわずかによるめく。

「とどめ！」

すると大振りで拳を放った部長！

かかった！

私は、余裕しゃくしゃくで拳を避けると、秘密兵器を懐から取り
出す！

そして！

「な、こ、これは滅紋符！！」

滅紋符。退魔士が使う。退魔の道具の一つ。

特別な紋様が描かれているお札で、力の弱い魔なら貼るだけで消
滅させることができる。強い魔に大して効果はないけど、ようは使
い次第。

どんな物でも使い道はあるのだ。

「天と地の理から外れた者よ。何故に生者に危害を加えんとするか
！我が力にて汝を滅つさん！！」

これだけでは意味がない。

「ふん、こんな物！」

部長が拳を放った、その瞬間

「断！！」

叫びながらカウンターで部長の額に貼った滅紋符に拳を入れる！

「な！なん」

驚愕の声を最後に部長は、その場に倒れた。

「ふう……うまくいった」

額に浮かんだ汗を拭くと、私はその場にへたり込んだ。

危なかった。鼻先—センチの所まで部長の拳は迫っていた。こちらの拳が先に当たらなかつたらと思うと……ぞつとする。

「滅したんですか？」

郷谷さんが心配そうにこちらに駆け寄ってくる。

「いいえ、一時的に意識を飛ばしただけ。一時間も経てば気がつく」
滅紋符のオリジナルの使い方その一『断』。

滅紋符を増幅装置として、相手の額に貼り付け、そこに気を籠めた拳を入れる。すると滅紋符によって増幅された気　オーラ　が相手の精神にダメージを与えるのだ。

ただし普通の滅紋符には気を増幅する能力はない。紋様を少し変更しなければ、増幅能力は備わらないのだ。つまりその変更点を知っている者、私にしかできないのである。

「じゃあ、今のうちに封印すれば……」

「あ、ちょ、ちょっと駄目！やめて郷谷さん！」

黒封石に封じようとする郷谷さんを慌てて止める。

「え、ど、どうしてですか？」

きょとんとして、私を不思議そうに見る郷谷さん。

この人本当に土地神なのだろうか……。

「人間と同化している魔を黒封石に封じると、元の人、つまりこの場合だと部長。部長の精神まで封じちゃうの」

「え、ということとは……」

「そう、後に残るのは、ただの肉の塊ってわけ」

「あ、危なかった。……えっとじゃあどうすれば？」

「とりあえず部長と分離させなきゃ」

そう言っ、私は立ち上がった。

ちなみに魔を滅する事ができる退魔道具で安価に作れるのは滅紋符しかない。そうすると普通の退魔士の主力武器は滅紋符だけ、ということになる。

しかし強力な魔は滅せない。ということは、勝てない。

だが、それを解決するのが黒封石なのだ。

「ここをこうして……」

強力な魔は滅せなくても、封印する事はできる。

黒封石に封じて、ある特殊な紋様が描かれた陣の中に石をおいて置くと、魔は浄化されて消滅する。

そうすると黒封石は、またただの石に戻る。

そう何度でも使えてお得なのが黒封石！

……まあ、ただ一つ問題がある。

退魔士じゃない人間が魔を封印してある石を長い間持っている、精神が侵される上に、気を吸い取られて体調不良になる。その上たまにこうして部長みたいに乗っ取られる。

元々その場ののぎみみたいな物だから、気を吸ってある程度力を蓄えられると、簡単に封印は解けてしまうのだ。だから戦ってある程度弱らせてから封印する。

弱らせるには、気を籠めた攻撃をすればいい。

「え〜とここがこうなって……で、できた」

所要時間二十分。グラウンドに描いた『退魔陣』は我ながら力作だ。

部長みたいに精神を乗っ取られた人から、魔を追い出すのに使うのが『退魔陣』。ちなみに魔が乗っ取る生物は人に限らず、ほとんど全ての生物に乗っ取れる。だから乗っ取られた生物の大きさによって、陣の大きさも変わり、人の場合だとかなり大きい陣を描かなければいけない。

「す、凄いですね。大きいです」

「うん。まあね。じゃあ、部長を紋様を消さないようにうまく陣の上に乗せてと」

部長を郷谷さんと担いで、陣の上に移動させる。

「じゃあ、郷谷さん。準備いいかしら？間違っても結界が解けないようにしてね」

「は、はい」

今郷谷さんには、結界を張ってもらっている。空間を作り出し、外界との繋がりを一切遮断するものだ。周りの風景に変わりはないけれど、実際には全く違う空間にいる。

郷谷さんが土地神だからできる結界だ。私にもできない事はないが、かなりの時間を要する。

「じゃあ、始めるわね」

まず陣の外に座り、目を瞑って精神統一をする。

「大地の精よ。我が声ちからにちから応えて、その力貸したまへ」

先程の戦いもあって、自分一人の力では退魔陣を実行することはできない。

だから大地の精霊から力を借りるのだけれど……これは結構代償が大きい。力を借りて、約一時間は普通に動ける。だけど時間が過ぎると急激に疲労感が体を襲い気を失う。

何故か？それは精霊の力があまりにも大きいからだ。精霊の力を受け入れるには、人間の器は小さすぎる。

まあ、力を借りている間は自分の力も増すのだから文句は言えない。

「く！うう……」

額の辺りに妙な違和感を感じる。

気が集まっている証拠だ。気は額から体内に入り、丹田に溜まる。

力が完全に体内に入ると、呪法を実行する。

「生者に仇なす悪しき者。我が力にて汝その姿、今ここに現せ！」
即席で造った陣の一番外側、円の部分が淡い光を帯び始める。光は部長が横たわっている中央に向かって徐々に収束していく。

陣全体が光輝く！

ブワ！！

陣中央から強烈な風が巻き起こり、砂煙に視界が遮られ
。「!?!」

強烈な衝撃が腹部を襲い、私は後方に吹き飛ばされた。

何回か地面を転がった後、私は痛みを堪えてなんとか立ち上がる
が……。

「うーうー……」

瞬間激痛が腹部を駆け巡る。

「な、中峰さん!だ、だ」

ドン!

郷谷さんの姿が衝撃音と共に砂煙のむこうに消えてしまった。

そしてかわりに姿を現したのは……。

「き、貴様。せ、せつかく手に入れた、ば、媒体を、そ、そのつ、
罪万死に値す、する」

この世にあらざる者、異形の人型。

顔はなく、右肩が異様に膨れ上がった化け物……これが魔。

この姿こそ、本来の姿。

「あら、クズとか言ってたなかったけ?」

精一杯強がつて、そう言い返す。

痛みが消えない。脂汗が大量に額に浮かぶ。

まともに戦ったら勝ち目なんて……まして封印なんて絶対無理……

…。

「こ、こんなす、姿じゃ、ろ、ろくにはな、話すことも、もできな
い。に、人間に、ち、近づくと、事だ、だって」

「へえ、黒封石に入っていないと何もできないの?それならまた戻し
てあげようか?」

人型との間合いを一気につめる!

が。

「う、動き、に、鈍い。け、怪我でもし、したか?」

ズド!

「あう!」

き、
気を失いそ……。

第一回 魔を滅する者6（後書き）

後は終わりに向かって進むだけです!!

第一回 魔を滅する者7 (前書き)

最終話一歩手前です！

第一回 魔を滅する者7

7

ああ、夢か。

学校のグラウンド。人型と女が戦っている。

暫く前に見た夢だ。

「あう！」

女の悲鳴。と、共に女が後方に吹き飛んだ。

女はグラウンドを転がり、そのままピクリとも動かなくなった。

……前の時と微妙に違うな。前は何度吹き飛ばされても女は立ち上がったのに。

「く、く、お、おわ、終わり、か？」

人型が言葉を発する。奇声じゃない？今回は日本語を喋ってやがる。化け物のくせに生意気だ。化け物は化け物らしく奇声を発し。

そ、そういえばこの間の夢。

郷谷が殺された、あの夢。

あの夢で見た化け物は、こんな喋り方だったような気がする。

目を凝らして、人型を見る。だが、暗く、少し遠い事もあってよくわからない。

「……った」

「ん、ど、どうし、た？い、命、ご、ごいでも？」

「かかった！」

女が大声で叫んだ。

その声に危険を察知したのか、人型は後ろに飛びずさる。

「深き底に眠りし我が力！我が声！我が心！我が心に呼応しその力、今眠りより覚めよ！」

光の弓が女の左手に現れ、右手に矢が現れる。

その眩しいぐらいの光に照らされて、女の顔が見える。

最初は理解するのに時間が掛かった。

だけどそれは、見知った顔で。

そう、中峰で。

「滅！！」

ヒュ！

風切り音と共に人型に向かって飛翔する矢。

当たる、かと思われた矢は惜しくも人型をかするだけで終わった。

「そ、そんな！」

光の弓を手に、絶望した表情を浮かべた中峰。

なんでだ？また射てば……。

「あ、危ない、と、ところだっ、た。だ、だがも、もうっ、射てま、

まい？」

「く！」

そうか、もう力が残ってないのか。

それはそうだよな。人を吹き飛ばすほどの攻撃を喰らってるんだ。

今立っていること事態が奇跡だろう。

ということは、中峰は殺されるのか？

また、そんな夢か？

前は郷谷で。

今度は中峰？

たまには助けられないのか？

「中峰！逃げろおお！！」

俺は叫んだ。それと同時に人型に向かって走る。

どうせ夢だ。殺されたって死なない。

「ぶ、部長！だ、駄目！！」

中峰が叫ぶ。

俺はそれを無視して人型に突っ込み、拳を振るう！

ズド

「え？……お、おいおい。嘘だろ？夢でも俺ってかっこ悪いのかよ」

拳が当たるより先に、胸に衝撃が走る。

人型の……腕が刺さっていた。

「ば、馬鹿な、や、奴。く、くく、くく」

人型が笑う。ムカついて人型を睨む。

そこで気づいた。やっぱりこいつ、この間郷谷殺した奴だ。

「ぶ、部長おおおおー！」

中峰がこちらを見て絶叫する。

大袈裟だな。どうせ夢なのに。少し笑ってしまう。

「ごぼ、ごぼごぼ……??？」

声が出ない。その代わり口から何か液体が漏れ出す。

手で口を拭って、その液体を確認する。

血だ。

そういえば胸が痛い。苦しい。

なんだか意識も朦朧としてきた。

ああ、そうか夢から覚めるんだ。

前もそうだったし。

じゃあな、中峰。そして現実でまた会おうな。

目の前で繰り広げられる信じられない光景。

ぶ、部長が。部長が……。

「部長……」

なんで、なんで笑ってるんですか？

死んじゃったんですよ？それなのになんでそんなに笑ってるんで

すか？信じられないくらい眩しい笑顔で、そんな笑顔見たの久しぶ

りですよ。

小学校の時と中学校の時以来ですよ？

凄く素敵な笑顔だな〜と思って、また見たかったから、わざわざ

部長が通ってる高校調べて、試験受けて合格して、文芸部に入って

……なのになんで？

もつと見たいのに。これが最後なんですか？
なんで？

「馬鹿、な、な奴。し、死ん、だ」

こいつだ。こいつがいけない。

こいつのせいだ。

こいつが！！

「部長から離れるおお！！」

「あ、ああ？ど、どうした？な、なんだ？ま、まだやる気、か？
腕を振るって、ゴミみたいに部長を捨てる！

こいつ！こいつだけは！

殺す！

「うああああ！！」

「は、はりき、きっちゃって」

私は人型に拳を放った。

パシ

「く、くく、こ、この程度な、なんか、じゃ」

「ああああ！！」

人型に軽く止められた拳。

だが、そんな事関係なく、私は腕にありつただけの力を籠めて押し
だす！

「む、無だ　？！き、き、きえ、る？」

驚愕の声を出す人型。

それもそのはず。私の拳を止めた腕が消滅した。

「な、なん、で？」

その瞬間人型は完全にこの世から消えさった。

「はあ、はあ……ぶ、部長！」

大地に横たわる部長に駆け寄ると、抱きかかえた。

口からは血を流し、胸は無残にもえぐられている。

それなのに……顔は笑ってる。

「す、すいません中峰さん。気を失ってました。??な、中峰さ

?!え、せ、先輩?ど、どうして……」

郷谷さんは驚愕の声を上げると、その場に崩れ落ちた。

無言の状態が続く、それはもの凄く長かったかもしれないし、ほんのちよつと時間だったかもしれない。

そして沈黙を破ったのは、私だった。

「郷谷さん。私ね。昔いじめられてたの。小さい頃ずっと。誰かに助けてもらいたかった。でも親も先生も誰も助けてくれなかった」
「なんの希望もなかった時のそんな思い出。奇跡も神も何も信じてなかった。自分だって信じられなかった。小学生なのに自殺を考えた事もあった。」

どうしようもなく辛い日々。生きていても意味がないと思ってた日々。

そんな時部長が現れた。

「そんな時にね。部長は、部長だけが助けてくれたんです。部長は笑って、俺喧嘩好きだからって言って、お前の為じゃないからなって言って。笑って言うてくれたんです」

嬉しかった。喧嘩好きだから、お前の為じゃないからって言われたのに。

なんでか凄く嬉しくて、涙がでた。

だって誰もそんな事言うてくれなかったんだよ?

「生きてもいいかかって思えた。それで中学になった時もね。私いじめられてたの。そうそういじめって終わるものじゃないから」

でもこの時は死のうなんて考えなかった。

だけど辛くて辛くて、いつも校舎の裏や人が見てない所で泣いてた。

「中学二年生になった時。私はいつもと同じ場所で泣いてた。悔しくて、辛くて、ただ泣いてた。そしたら部長が来たんだよ?信じられる?また部長が来たの」

部長は何も言わないで私の隣に座った。部長は何も話そうとしなかった。だから私も何も言わなかった。

暫くすると部長は急に立ち上がって、どっかに行ってしまった。

ああ、見捨てられたんだなって、そう思った。

「だけどね。部長が座ってる所に何かあったの。紙の切れ端。なんだろうって思っ、手に取ったの。そしたら本の名前と一言書いてあったの。なんて書いてあったと思う？」

部長って凄いなって思えた。

こんな人になりたいなって。

「この本面白いよ。て、書いてあったの。だから私買ったんだ」

本のタイトルは『曇りのち晴れ』。変なタイトルだなって思った。だけど読んでみると凄く面白いの。

しかもね。

その小説の主人公っていじめられっ子なの。

私みたいな、いじめられっ子。

だけど明るく強く生きて、最後にはハッピーエンドを迎えた。

本のタイトルの『曇りのち晴れ』ってね。今はまだまだいい人生じゃなくても、いつかきつといい人生になる。そんな意味だったの。凄く素敵だった。

「私その時からなんだ。本に興味持ったの。それで後日ね。部長にお礼を言いに行ったの。そしたら部長つたらね」

『何それ？知らない。だけどその本面白かったんだろ？よかったじゃん』って笑って言ったの。

でね。ここで気づいた事があったの。

部長、私の事覚えてなかった。

なのにまた助けてくれた。

「部長って凄いやね。覚えてなかったんだよ。ふふ、高校で再開した時も覚えてなかったんだ。なんで覚えてくれないんだろうね？はははは」

私は精一杯笑った。笑ってたはずなのに……なんで？なんで涙がでてくるの？

「どうしてこんな事になっちゃったの？これからもっと楽しくなる

はずだったのに。やっと私の人生晴れてきたのに……なんで」

私に希望をくれた部長。

私に本の楽しさを教えてくれた部長。

これからももっともつと教えてもらいたい事一杯あったのに……。

「……うん。わかった。中峰さん、私に任せて」

「え？」

「私は土地神。この土地での出来事は私が責任取らなきゃ」

そう言っつて、郷谷さんはこちらに近づいてくる。

一体何をするつもりだろう？

「また会えるかわからない。もしかしたら私は消えてなくなるかもしれない。だけど、ね。一人の人間にここまで頼りにされて愛される人が死んでしまうのは、あまりにも悲しすぎる。バッドエンドは私も嫌いな」

そう言っつと、郷谷さんは部長の額に手を当てた。

「先輩。元気になったら教室行きますから」

その夜。奇跡というには、すこし悲しい出来事が私の目の前で起きた。

第一回 魔を滅する者7（後書き）

次が最終話。というかエピローグです!!

第一回 魔を滅する者 エピソード（前書き）

ついに第一回エピソードです！

第一回 魔を滅する者 エピローグ

エピローグ

『桜桃町でまた通り魔事件が』
テレビを消すと、のんびりと立ち上がって家を出た。
上を向くと、眩しすぎる太陽と澄んだ青空が広がっている。なんとなく気分も晴れやかになった。

「部長。おはようございます」

「ん？ああ、中峰。おはよう」

満面の笑みの中峰。

俺もそれに応えて、少し笑った。

それから先は、まあ以前と一緒に大した会話が起こる事もなく、学校に着いた。

正面玄関で別れを告げると、教室に向かった。

「よう、霧森」

「なんだ雉島か」

教室に入ると、真っ先に声をかけてきたのは、友達以下生物以上の雉島だった。

「俺だと挨拶もなしなの!？」

「知らねえよ。ほら、席着けよ。藍ちゃん来たぞ」

ぶつぶつ文句を言いながら、俺の前席に座る雉島。
なんだかちよつと笑ってしまう。

「はあ……二日酔い。ホームルーム終わり」

「早いし！」

「藍ちゃん自由すぎるから！」

クラスメイト達が藍ちゃんに笑いながら文句を言っている。

藍ちゃんに何があったのかは知らないが、時々二日酔いの時があ

る。おかげでホームルームで重要な事を伝えなかつたりする。
まあ、ホームルームはいつも寝ているから関係ないけど。

「はい、お金」

「毎度、メロンパンおまけしといたから、感謝しながら食べてよ」
「詩音さんセンキュー」

昼休み、詩音さんがいる購買でパンを買つと屋上に出た。

本当は立ち入り禁止なのだけれど、見つからなければ関係ない。
「お待たせ」

「部長。遅いです」

「いや、購買が混んでたもんで」
そう言つと俺は、腰を下ろす。

袋からパンを取り出し、一口かじると、美味しそうな弁当を食べ
ている中峰に話しかけた。

「今日で終わるんだよな？」

「ええ、ほとんど説明しましたから」

この一週間の昼休みと放課後は、今回の出来事について説明をし
てもらっていた。

あまりにも現実離れした事……いや俺が知らなかつただけで、現
実離れなんてしていない。この世の中で普通に起こっている出来事。
俺は、その中でもちよつと特殊な体験をしたみたいだ。

それは魔と呼ばれる者達との接触。

この世の者ではない生物。ただ、魔に関しては中峰自身もよく知
らないらしく、詳しくは聞けなかった。

わかっている事は、魔が人間に害をなすという事だけ。何故存在
するのもどこからやってきているのかも不明らしい。

そしてそれらを滅するための人達が『退魔士』と呼ばれる者達。
つまり中峰。

「……」

「と、そういう事です」

一般の人は、退魔士にはなれず。特殊な能力がないとなれないらしい。

ほとんどの退魔士は、家系や一族、代々受け継がれているみたいだ。

中峰はちよつと特殊らしく、先祖返りとかいうやつらしい。

つまり親・兄妹は退魔士ではなく普通の人で、中峰は遙か昔の先祖様の力がたまたま蘇ったらしい。

「……って、昼休み終わりだ」

「それでは続きは放課後にしましょう」

授業が全て終わると、鞆を持って教室を出る。

「あ、ちよつどいい霧森君。ちよつどいいかな？」

「え、いや、これから用事あるんで」

なんの用があるかは知らないけど、成宮なんかにつきあってる暇はなかった。

俺は、急いで部室に向かう。

ちよつど部室の前に来た時

ドン

「う、うわ」

何者かに後ろから追突されてよろめく。なんとか体勢を立て直すと、後ろを振り返った。

「わりい、わりい。ごめん」

「あ、いや、こちらこそ」

ぶつかったのは、上級生と思われる男だった。

……。

がちゃ

「中峰ごめん、遅く……って、いねえし」

なんだ急いで来て損した。

とりあえず自分の席に座ると、窓の外を眺める。

あいかわらずやる気がない運動部の一年生は、グラウンドの隅で

サボっている。

それに気づいた部活顧問が、サボっている連中に向かって歩きだした。

こりや盛大な怒鳴り声が聞こえそうだ……。

「あ、部長。早いですね」

「ん、ああ、中峰」

声に反応して、部室に視線を戻すと、入り口の所に中峰が立っていた。

「どこまで話しましたっけ？」

自分の席に着きながら、そう話しかけてくる中峰。

「えっと確か……」

昼休みの続きを話し始める中峰。

真剣に話して耳を傾けるが、どうも話の内容が頭に入らない。それはこの一週間ずっとで、正直話の内容なんて半分も理解できていなかった。

ここまで話が頭に入らない理由。

たぶんそれは郷谷の事が気になっているから……。

「なあ、中峰」

「はい？」

「……いや、やっぱりいい。話続けてくれ」

郷谷の事を訊こうとして、やっぱりやめる。

一応郷谷の事は聞いてある。

土地神だとか。

俺を助けてくれていた事とか。

ここにいない理由も……。

「部長。郷谷さんの事ですか？」

「あ、ああ……悪いな。どうも、な」

俺は、あの夜死んだ。

未だに信じられないが、確かに死んだらしい。

ただどうこうして今生きている……それは郷谷のおかげらしい。

郷谷の土地神としての力、そしてなによりその生命力を使って俺を蘇らしてくれた、そういう事らしい。

そして、そのおかげで郷谷は消えてしまった。

いや、正確に言うと、郷谷がどうなったのかはよくわからないみたいだ。

消えた、というのはあくまで推測。

もしかしたら今この土地のどこかにいるかもしれないし、消耗した生命力をどこかで蓄えているのかもしれない。

なにより消えたなんて考えるのは悲しすぎるから……。

「部長……今日は終わりにしますか？」

「え？い、いや別に。続けてくれ」

「でも部長。話聞けてますか？」

「ごめん……」

そう言うと机に突っ伏した。

少し眠りたかった。

「先輩。これどうですかね？」

「ん？新しい小説か。ちよっと待ってるよ。今読むからな」
目が覚めると、そこにいたのは郷谷と知らない男だった。

辺りをよく見ると、現在の部室とは微妙に違った。

また夢だろう。

「おお、いいんじゃないのか。今まで読んで中で一番面白いぞ」

「そうですか！先輩ありがとうございます！」

「あはは、大袈裟な奴だな」

嬉しそうに笑う郷谷。そして先輩と呼ばれた男。

たぶんこれは、郷谷が生きていた頃の文芸部なんだろう。しかし部員が二人なんて、昔っから文芸部って人気ないんだな。

「それで先輩。あのう……」

「ん？なんだ？」

顔を赤らめて、うつむく郷谷。

「い、いえ、やっぱりなんでもないです」

「そうか？それよりさ、郷谷。こ、今度どこか、あ、遊びに行かないか？」

「え？あ、は、はい！！」

なんだか微笑ましい光景だ。

最近見ていた夢とは大違い。とても心が安らぐ。

暫く見ていると、なんだか自分が邪魔なような気がして、自分に早く目覚めてもらいたかった。

「先輩。気にしないでください」

「え？お、俺？」

郷谷が何故だかこちらを見ていた。

「私、先輩の力になれてよかったです。先輩といた時間は凄く楽しかったです」

「で、でもな。俺のせいで……」

「ふふふ、大丈夫ですよ。元気になったら行きますから」

「郷谷行くぞ〜！」

「あ、は〜い。それじゃ先輩。また、いつか会いましょう」

「……夢か」

身を起こすと、部屋を見回す。

本が沢山あって、いかにも文芸部って感じの部屋。

「あ、部長起きました？」

そして後輩の中峰がいて、その先輩の俺がいる。

「ああ。なあ、中峰。今度どこか行かないか？」

「え？い、いきなりどうしたんですか？」

「今回の事で苦労かけたしな。それにちゃんと話を頭にいれたいし」
俺はそう言って笑った。

終わり

第一回 魔を滅する者 エピローグ（後書き）

ここまで読んでくれた方！感謝感激です。

一応これで第一話は終わりです！！次からは第二話は始まるはずですが……いつになるやら……気長に待っていてください！

では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4176j/>

曇りのち晴れ時々退魔

2010年10月28日07時05分発行